2024 10.28 vol.1089

JAグループ

JA全農ウィークリー

JA ZEN-NOH WEEKLY

Web版
JA全農ウィークリーは
こちらから

https://www.zennoh-weekly.jp/

2面
日清食品と
生産者交流プロジェクト
（米穀部）

3面
JA全農親子
農業体験ツアーを開催
（広報・調査部）

配送先変更（住所・宛名）、
配布部数変更はこちら

https://x.gd/G3W90

写真提供：秋田県本部

全農 ZEN-NOH

食と農を未来へつなぐ。

News!

日清食品と生産者交流プロジェクト

稲刈り体験を通じて実需者と生産者が交流

米穀部

全農は9月9日、秋田県のJA秋田おばこ管内の圃場（ほじょう）で日清食品㈱と共に生産者交流の場として稲刈り体験を実施しました。

全農と日清食品は、今年5月に生産者交流プロジェクトとして田植え体験を実施しており、今回は同じ圃場で稲刈り体験を実施し、豊作の喜びを分かち合いました。

生産者と実需者である日清食品が稲刈りを通じて直接交流することで、互いの生産や製品に対する思いを共有する場になりました。

稲刈りを体験した日清食品の深井雅裕常務取締役は「生産現場での体験を通じて、製品のおいしさは、ここから始まっているんだということを実感しました。春の田植え以降、お米を食べると生産現場の皆さまの顔が浮かび、それだけでもこれまでと違う気がします。取引関係を超えた人間関係の構築により、新たな取り組みや価値が生まれていくのではないかと感じています。今度は当社の工場にお越しいただき、生産したお米がどのように消費者の手に届くのか知ってもらいたいです」と話しました。

プロジェクトに参加した関係者

稲刈り体験を行った日清食品の深井雅裕常務取締役(左)と全農の金森正幸常務理事

News!

11月に「第42回全農酪農経営体験発表会」

「全農学生『酪農の夢』コンクール」の表彰式も併催

酪農部

酪農部は11月20日、「第42回全農酪農経営体験発表会」を開催します。

2024年の発表会も昨年に引き続き「未来を創る『酪農のなかま』」を副題とし、酪農家はもちろん、それを支える方々が登壇し、優良な取り組みを発表します。当日は日経ホール（東京・大手町）での実開催に加え、YouTube Liveでも配信予定です。

発表会では、北海道、青森県、栃木県、千葉県、滋賀県、大分県の酪農家および各団体から酪農経営の工夫や情報発信、新規就農支援の事例を紹介します。

また今年の特別企画として、全国の牧場をめぐり写真を撮る牛写真家の高田千鶴さんにも講演いただき、会場ではミニ写真展も開催予定です。

併催企画として、酪農の将来を担う学生を対象とした「第18回全農学生『酪農の夢』コンクール」の表彰式を行うとともに、受賞者の作品朗読も行います。

表彰式はYouTube Liveで配信します。参加・視聴希望の方は左記の2次元コードからお申し込みください。

来場・視聴申し込みはこちら ▶▶▶

締め切り：11月8日(金)

News!

JA全農親子農業体験ツアーを開催

5月に植えた稲や芋を収穫、田んぼで生きもの調査

広報・調査部

全農は9月15日、日帰りで農作業を体験できる「JA全農親子農業体験ツアー」を茨城県石岡市で開催しました。

全農は、食農教育の一環で2005年から㈱農協観光主催の農業体験ツアーに特別協賛しています。農業に親しむ機会の少ない首都圏に住む子育て世代に、農業への理解を深めてもらうことを目的に開催しました。

ツアーは、全農提供のラジオ番組「あぐりずむ」のリスナーを対象に募集し、番組パーソナリティーの川瀬良子さんと一緒に首都圏の8組25人の親子が参加しました。

5月に行った植え付け体験とのセット企画で、稲やサツマイモ、サトイモを植えた親子が再び集まり、待ちに待った収穫を楽しみました。稲刈りと一緒に田んぼの生きもの調査も行い、生きものを育む田んぼの役割や地域のお米を食べることの意義も学びました。

全農は、今後もこのような活動を通して、消費者に農業への理解を深めてもらえるよう取り組んでいきます。

親子で稲刈り体験

親子農業体験ツアー参加者

News!

イオンモール広島祇園でフェア&イベント

県産野菜グルメフェア、3-Rの文字並び替えクイズも

広島県本部

広島県本部はイオンモール広島祇園と共催で9月13～30日、「広島県産野菜グルメフェア」を開催しました。また、21～23日は同モール内で「3（さん）・R（あーる）のバラバラ文字並び替え」イベントを開催しました。

フェアでは、広島県産のナス、アスパラガス、トマトなどを使ったオリジナルメニューをモール内の三つの飲食店舗で販売しました。ナスとアスパラガスをふんだんに使ったカレーや、シイタケを使ったオムライスなどを通じて来店客に県産野菜の魅力をPRしました。

「3－Rのバラバラ文字並び替え」イベントには、3日間で約300人が参加。3－Rの取り組みを紹介したパネルを見た後に、3－Rに関連するキーワードを回答するクイズに挑戦しました。参加者はバラバラになっている文字を並び替え、3－Rについて楽しみながら学びました。また、フェアのオリジナルメニューを食べた人が参加できるガラポン抽選会も開き、多くの方がイベントを楽しみました。

参加者からは「3－Rは環境に良い取り組みだと知ることができた。今度は商品を買ってみたい」などの感想が聞かれました。

「3－Rのバラバラ文字並び替え」に挑戦する子どもたち

News!

2024「いわて純情米」新CM発表会

新CMのテーマは「朗希もり」

岩手県本部

岩手県本部は、いわて純情米アンバサダーで千葉ロッテマリーンズの佐々木朗希投手が出演する2024「いわて純情米」新テレビCMを制作し、9月23日に東京都内で新CM発表会を行いました。

CMでは、佐々木投手の身長192㌢にちなんだ高さ19・2㌢の「朗希もり」のごはんを、佐々木投手と野球少年たちが一緒に食べる様子が描かれています。

発表会には、達増拓也岩手県知事、いわて純情米応援団長の天津の木村卓寛さん、岩手県本部の伊藤清孝運営委員会会長、髙橋司県本部長らが出席しました。

いわて純情米新CM 佐々木朗希「朗希もり」編

佐々木投手もビデオ出演し「生産者の皆さん、毎年おいしいお米をありがとうございます。これからも『いわて純情米』を食べて頑張ります」とメッセージを送りました。

News!

JAグループの資源循環に関する取り組みを発信

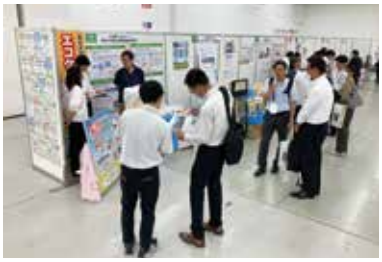
国内肥料資源活用に向けフォーラム出展

畜産総合対策部・耕種資材部

全農は9月25日に広島県立広島産業会館で開催された「国内肥料資源の利用拡大に向けたマッチングフォーラムin中国四国」で、畜産総合対策部サステナビリティ推進室が事務局となりJAグループ共同ブースを出展しました。

同フォーラムには国内肥料製造事業者や農機メーカーなど33社が出展し、270人が来場しました。

JAグループ共同ブースではJA鳥取中央が新設した堆肥センターや、岡山県本部の「瀬戸内かきがらアグリ事業」、広島県本部の「耕畜連携資源循環ブランド3－R」、中四国広域営農資材事業所の堆肥入り水稲一発肥料「エコケッコ～一発」を紹介するなどして来場者から関心を集めました。



来場者でにぎわうブース

12月は北海道での開催が予定されており、引き続きグループ一体で資源循環の取り組みを発信していきます。

News!

全農グループ総務・人事関連講演会を開催

ライン長らが反社対応・人権課題について考える

総務人事部

全農は9月18日、東京・大手町のJAビルで「全農グループ総務・人事関連講演会」を開催し、本所各部・事業所・県本部のライン長・子会社の人事担当部長ら275人が出席しました。

第1部「反社会的勢力に対する対応研修会」に続き、第2部では赤井隆史部落解放同盟中央本部書記長より「情報化時代における人権の可能性について」をテーマに講演していただきました。

赤井書記長は「21世紀は人権が守られる世紀となるのか、抑圧される世紀なのかの分水嶺（ぶんすいれい）の時期である。全農グループは、この講演会を二十数年続けており、非常に有意義。今後の発展に向けて、人権という基軸をしっかりさせ、人権の花が開くようになってほしい」とのメッセージを送りました。

「人権・同和に関する講演会」での赤井隆史書記長による講演

AgVenture Lab（あぐラボ）発

第5回

JAイノベーターズブートキャンプ修了

JAグループにマインドチェンジを

JAグループ全国組織8団体が共同で設立した（一社）AgVenture Lab（あぐラボ）は9月20日、「第5回JAイノベーターズブートキャンプ」の最終発表会を行いました。

JAイノベーターズブートキャンプは、次世代リーダーの育成と系統間の連携を目標に座学、プレゼン、グループワークなどを通じて、複数組織混合で構成されたチームで新規事業案を提案する全7日間の人材育成研修プログラムです。全国連を対象に2020年からスタートし、現在は全国8連をはじめ、県域組織やJA、電算センターからの受講生もいます。

7～9月に行った第5回の今回は、12組織22人が研修を修了しました。研修は「スーツ禁止」でいつもと違う仲間・環境・思考で、「実践」を積み重ねました。研修では、JAグループの強みを生かして、社会や組織の課題を解決するために、「正解」を探すのではなく、「新しい解」を検討しました。想定顧客へのヒアリングや、競合調査、ビジネスモデル構築など、納得いくまでとことん話し合って、思いをかたちにするべく事業案を作り上げました。

グループワークの様子

研修の前半では、講義やワークショップを通じて、自身と自組織を客観的に見つめる視点を持つこと、グローバルな視野で物事を考えること、起業家などの視座から世の中を見ることを体感。後半はスタートアップ企業の社長や新規事業およびスタートアップの起業などに携わる専門家などと壁打ちを繰り返し、事業案のブラッシュアップをしました。

最終発表会では、各チームで練った案を全農の戸井和久チーフオフィサーほか各連の役員に向けて発表。その中から、JAのみらいをつくる「正しい答え」を決めるのではなく、「唯一解はない」という前提のもと〝多様決〟*という方法を用いて「JAのみらいを創るで賞」を決定しました。

また、工学博士の慶応義塾大学・神成淳司教授とあぐラボ・荻野浩輝理事長による「事業創造には〝個益〟と〝公益〟の両立が必要」をテーマとした対話に、全国8連役員や受講生も加わり、会場全体で、これからのJAグループのありたい姿について議論を深めました。

役員、受講者、同じ目線での対話

発表前の最終調整に真剣な受講生

「第5回JAイノベーターズブートキャンプ」プログラム概要

	テーマ	プログラム
7/5（金）	外を見てJAグループの現在地を知り、WILLを探す	起業家講演、海外動向、自組織紹介、WILLを探すワークショップ
7/6（土）	サステナビリティの体感と、異業種から刺激をうける	SDGs・サステナビリティワークショップ、異業種交流アイデアソン
7/19（金）	WILLを言語化してアイデアにして、ピッチを体験する	ピッチとアイデア創発
8/2（金）	アイデアの種をビジネスアイデアに昇華させる	ビジネスモデル、顧客ヒアリング
8/20（火）	アイデアの壁打ちをする、外部有識者から刺激を受ける	メンタリング、外部有識者講演
9/3（火）	アイデアの壁打ちをしてプランの蓋然性を上げる	メンタリング、アイデアブラッシュアップ
9/20（金）	新規事業案発表、研修のまとめ	発表会、自分発見ワークショップ

*多様決「正統に良い案」×「正統ではないが良い（異端な）案」の投票数を乗算

JA Innovator's Boot Camp

「農業労働力支援室」6年目

農業生産基盤維持へ 多様な連携

兵庫県本部は、労働力支援を目的とした専門部署「農業労働力支援室」を設立して6年目を迎えました。農業労働力支援室は県内の各産地に出向き、生産現場の労働力実態調査を行った上で、産地に合わせた支援スキームを提案し、これにより県内の農業生産基盤維持に努めています。

パートナー企業と仕組み構築 農作業請負事業を拡大へ

兵庫県本部は、パートナー企業として㈱そうしんアグリと連携し、県中南部エリアのスポット的な労働力ニーズに対応する仕組みを構築しています。事業開始3年目となる昨年は、年間延べ6700人役の農作業労働力支援を実施し、今年は1万人役を目標に取り組みを進めています。

そうしんアグリによるキャベツ収穫作業

援農ボランティア事業で名産品「黒大豆枝豆」守る

丹波篠山市地域の名産品である「黒大豆枝豆（枝付き束）」を守る取り組みとして、消費者や研修参加者が生産者の現場作業を手伝い、産地を応援する「援農ボランティア事業」を行っています。

昨年は㈱農協観光と連携し、企業研修としての農業現場研修や、JAグループの職員研修で延べ60人が参加しました。今年度は新たに、飲食業を行う㈱ワールド・ワンと連携し「ONE TEAMプロジェクト」を発足。ワールド・ワンの運営する飲食店舗の利用者に対して農作業への参加を呼びかけ、延べ40人が参加しました。

「ONE TEAMプロジェクト」第1弾 丹波篠山黒枝豆の未来をともに考える！――のポスター

大学連携による支援事業 ピーマンや菊産地を応援

昨年から県北部「たじまピーマン」の収穫作業を支援する取り組みを開始し、今年は新たな取り組みとして大阪大学、とよおか・モンゴル友好協会と連携し「ピーマン収穫&モンゴルスタディツアー」を開催。3泊4日で学生はピーマン収穫とモンゴルの文化を学び、都市農村交流の取り組みに発展しました。

また、神戸大学とは2年前から連携し、南あわじ地域の赤菊産地を維持し継承することを目的とした取り組みを行っています。今年は新たな担い手を迎え入れるための体制づくりとして、農家の作業風景動画の撮影や地元学生による農作業支援を開始し、関係機関を巻き込んだ活動をスタートしています。

ピーマン収穫に参加した大阪大学の学生と受け入れ生産者

農業労働力支援室の取り組みをまとめた動画

黒大豆枝豆編

そうしんアグリ編

神戸大学と赤菊産地編

JAズームイン

大型複合商業施設を拠点に 所得向上・農業振興・活性化へ

JAふくおか嘉穂（福岡県）

概要	2024年3月31日現在
正組合員数	5356人
准組合員数	1万1276人
職員数	272人
販売品取扱高	35億3千万円
購買品取扱高	21億4千万円
貯金残高	1220億7千万円
長期共済保有高	2835億7千万円
主な農畜産物	米、麦、大豆、イチゴ、アスパラガス、柿、イチジク、その他野菜・果樹、畜産

JAふくおか嘉穂は、福岡県の中央部に位置した飯塚市・嘉麻市・桂川町の2市1町で事業を展開し、水稲栽培を中心に麦・大豆の基幹作物、露地野菜、果樹、施設園芸など幅広い農業が行われています。水稲栽培では、消費者へ安全・安心な農産物を提供することを目的に、積極的に「ふくおかエコ農産物認証」の特別栽培米を推奨。県内トップ715㌶の作付面積を誇り、環境に配慮したおいしいお米を生産しています。

複合商業施設として人気を集める「カホテラス」

人気の複合商業施設「カホテラス」を弾みに

「カホテラス」は、農家所得の向上、農業振興、地域の活性化を目的として敷地面積約4万平方㍍、駐車場400台を有する複合商業施設として2022年11月にオープンしました。エリア最大級の農産物直売所「かほ兵衛の台所」を中心として、フードコートや和・洋食レストラン、アパレル、ドラッグストアなど魅力ある施設が充実しています。また、子どもたちが遊べる芝生広場も併設。政令指定都市である福岡市や北九州市から車で60分のアクセスの良さもあり、旅の一休みにも活用され、昨年の来場者は約64万人と飯塚市の人気スポットになっています。

地産地消の農産物直売所「かほ兵衛の台所」も好評

農産物直売所「かほ兵衛の台所」は、管内農畜産物の販売の拠点として、地産地消をテーマに売り場面積1000平方㍍の中に、550人以上の会員が出荷する米・野菜・果樹・加工品や全国から厳選された鮮魚など、毎日の食卓に欠かせない「食」を取りそろえています。特に野菜については、出荷会員が毎朝、安全・安心で新鮮な旬のものを出荷しており、最盛期には80品目が商品棚に並びます。

農産物直売所「かほ兵衛の台所」

季節に応じたイベントやセールの実施、SNSでの積極的な情報発信による集客にも取り組んでおり、利用者から好評を得ています。

さまざまな地場食材が並びにぎわう店内

ZEN-NOH COUNTDOWN JAPAN
JA全農提供FMラジオ番組（TOKYO FM／JFN38局）
毎週土曜日13：00～13：55
東京・半蔵門のアースギャラリースタジオより生放送！

ニッポンエールシリーズの新商品発売

「和歌山県産有田みかんグミ」「和歌山県産有田みかんゼリー」

全農は、ニッポンエールシリーズの新商品として「和歌山県産有田みかんグミ」と「和歌山県産有田みかんゼリー」を開発しました。全国農協食品㈱より、全国の量販店を中心に10月28日から販売します。　【営業開発部・全国農協食品㈱】

ニッポンエール「和歌山県産有田みかんグミ」と「和歌山県産有田みかんゼリー」は、和歌山県のJAありだが供給した「有田みかん（ゆら早生）」の果汁を使用しています。

「有田みかん」はミカン栽培450年以上の歴史を誇る有田地域で生産されています。有田地域で長きにわたり継承されている「みかん栽培の礎を築いた有田みかんシステム」は、2021年に日本農業遺産として認定されました。「有田みかん」の甘さやコク、ジューシーさをニッポンエールのグミやゼリーでお楽しみください。

「和歌山県産有田みかんグミ」（左）と「和歌山県産有田みかんゼリー」

「食べて応援!! まるごと青森ナイター」に協賛

東北楽天vs千葉ロッテ、抽選会で県産品プレゼント

青森県本部は10月1日、楽天モバイルパーク宮城（仙台市）で開催された東北楽天ゴールデンイーグルスの試合に「ＪＡ全農あおもり食べて応援!! まるごと青森ナイター」として冠協賛しました。　【青森県本部】

▲贈呈式の様子

パーク内には協賛ブースを設置し、先着1000人に青森県産品が当たる抽選会を実施しました。

青森県産米3銘柄「青天の霹靂（へきれき）」「はれわたり」「まっしぐら」のパックごはん、リンゴ「つがる」「きおう」、ニンニク、「あおもり和牛」のステーキなどの賞品をクリーンライスレディあおもり、ミスりんご、青森いきいきやさいレディらが当選者に手渡しました。

東北楽天ゴールデンイーグルスと千葉ロッテマリーンズへの商品贈呈式では、両球団を代表した中島大輔選手（楽天）、和田康士朗選手（ロッテ）へ青森米「青天の霹靂」やリンゴ、ニンニクなど1年分を贈呈しました。

◀賞品を手渡す青森いきいきやさいレディ

JA全農の産地直送通販サイト

JAタウン ショップ紹介

かが・のと味自慢

加賀野菜の一つであり、石川県金沢市を中心に栽培されている「加賀れんこん」です。肉質がきめ細かく、でんぷん質が多いため強い粘りがあるのが特徴です。食味は肉厚で食べ応えがあり、味が濃く、もっちりとしています。

でんぷんの含有量を上昇させるために地上部の茎や葉は、収穫直前まで刈り取らずに残します。その分手間はかかりますが、じっくり熟成させることで、見た目の美しさよりも独特の味や食感になるようにこだわって栽培されています。

また、昔から定められている厳しい選別基準で選別しており、品質の高い「加賀れんこん」を厳選してお届けしています。

「加賀れんこん」　○秀Ｌ（約5kg）・・・6280円（税込み）

ご注文はこちらから

▶ JAタウンはこちらから https://www.ja-town.com
▶ お問い合わせは shop@ja-town1.com

発行／全国農業協同組合連合会 2024年（令和6年）10月28日発行（毎週月曜日発行）
第3485号　編集・発行人／広報・調査部　澤田洋志
〒100－6832 東京都千代田区大手町1丁目3番1号JAビル　TEL03（6271）8055

『JA全農トピックス』の公式Xはこちらから

私たち全農グループは、生産者と消費者を　安心で結ぶ懸け橋になります。